反田恭平さん応援レポート

反田恭平 ピアノ・リサイタル2017 全国縦断ツアー

2017年7月28日（金）
富山県教育文化会館

全国13都市での縦断ツアー

7月8日(土)を皮切りにスタートした反田恭平さんのリサイタル・ツアー「反田恭平 ピアノ・リサイタル2017 全国縦断ツアー」。
全国13か所にて開催される予定で、これまでに川崎、静岡、名古屋、長岡と続き、この日の富山公演が5公演目。

2か月にわたり展開されるツアーには、2種類のプログラムが用意されている。ショパンのエチュードを軸にしたプログラムⅠと、リストのソナタを軸にしたプログラムⅡ。
この日の富山公演ではプログラムⅠが予定されている。

会場の富山教育文化会館に向かうと、すでに多くのお客様。開場時間とともに場内に人が溢れる。
「・・・（富山に）いつまた来てくれるか、わからないから、絶対来なくちゃと思って・・・」との会話が聞こえてくる。チケットは早くに完売。満員の会場に着席した。

＜全国ツアー日程＞
7月8日（土）　@ミューザ川崎シンフォニーホール
7月13日（木）@静岡音楽館
7月15日（土）@愛知県芸術劇場コンサート ホール
7月21日（金）@長岡リリックホール　コンサートホール
7月28日（金）@富山県教育文化会館
8月3日（木）　@札幌市コンサートホールKitara
8月4日（金）　@函館市芸術ホール
8月6日（日）　@福岡シンフォニーホール(アクロス福岡)
8月17日（木）@岩手県民会館中ホール
8月20日（日）@福島市音楽堂
8月26日（土）@兵庫県立芸術文化センターKOBELCO大ホール
8月31日（木）@秋田アトリオン音楽ホール
9月1日（金）　@東京オペラシティ コンサートホール

集中力。パワフルに、繊細に、思い切りよく駆け抜ける

反田さんが登場。
やや低めにセットされた椅子。ストレッチのように指をほぐし、すっと弾き始める。

最初の曲はスクリャービンの幻想曲。モスクワ音楽院で研鑽を積んできた反田さん、ロシアに行き、初めて取り組んだ作品が、この曲だったそうだ。ダイナミックな音を響かせ、会場の皆様をぐっと惹きつける。
2曲目はドビュッシー「喜びの島」。色彩豊かな曲を軽やかにきらきらと。続いてはドビュッシーの「月の光」。曲と寄り添うような美しく優しい音色に情景が浮かぶ。

一転して軽快なリズムで始まったのは、シューマンの「ウィーンの謝肉祭の道化」。ジムで筋力トレーニングを欠かさないという反田さん。筋力によるものなのか、手指も強靭そうだ。たっぷりの強音の力強さと弱音の繊細さ、リズムの緩急の表現が、無理なく自然体で美しい。弾きながら口を動かしている。曲と語り合っているのか、口ずさんでいるのか。柔らかい表情は、なんだか幸せそうに見え、こちらも幸せな気分で聴き入る。
ラストの楽章を華やかに弾き終えて前半終了。
熱い拍手が何度も贈られていた。

後半はショパンの4つのマズルカOp.17でスタート。第10番、11番、12番、13番の4曲を流れるように弾いていく。ポーランドの民族舞曲がベースのマズルカを、しなやかに、楽しそうに演奏する。

そして最後はショパン「12のエチュード（練習曲）Op.10」。3番「別れの曲」、5番「黒鍵のエチュード」、12番「革命のエチュード」など、よく知られた曲も含め、全12曲を一気に弾いていく。
凄まじい集中力。音楽に対する自身の姿勢や想いを凝縮し、迷いなく音で表しているかのよう。パワフルに、かつ抒情的に駆け抜けていく。
ラストの「革命」を大迫力で弾き終えると、客席の皆様からは大きな拍手とブラヴォーの声。何度も繰り返されるカーテンコールに応えるたたずまいも個性的。

アンコールにはリストの「水の上を歩くパオラの聖フランチェスコ」。鳴りやまぬ拍手にもう1曲。反田さんのアンコール定番となりつつあるシューマン/リスト「献呈」も弾いてくれた。
圧巻の演奏に満席の会場の皆様も大満足のご様子。熱気と興奮が会場を包んだ。

終演後のサイン会は長蛇の列。多くの方々がサインのあとも最後まで残り、サイン会を終えて楽屋へ戻る反田さんを温かい拍手で見送ってくださっていた。

演奏中の写真：　©青柳聡氏
（演奏中、舞台上の写真は全てツアー初日、ミューザ川崎での公演時のもの）
会場写真は財団事務局撮影

「会場ならではのライブ感を味わっていただけたら」

終演後、反田さんに話を聞いた。

－充実のプログラム；
「・・・ツアーのプログラムを考えるにあたり試みた曲目リクエストで一番多かったのがショパンのエチュードでした。絵画的で素晴らしい作品ですので、この曲を今回のツアーで繰り返すことは、自分の、ある種飛躍のためにもプラスだと思い、組んでみました」
「・・・最初の曲は、ロシアに住んでいたのでロシアの曲から始めようと。・・・『喜びの島』は、『のだめ』で知って。リサイタルで弾いてみたいと思っていたので入れてみました」
人気作品『のだめカンタービレ（二ノ宮知子氏作）』の大ファンである反田さん、実家にはもちろん全巻揃っているそうだ。

－　各会場、多くの方がご来場。どんな演奏をしようと？
「・・・聴いてくださる方々が自分の演奏をどう捉えてくださっているのか、自分ではよくわからないのですが・・・でも、もし自分が聴く立場だったら、ミスタッチが全くなくて、すごくきれいな演奏で、というのも凄いと思うけれど、何かライブ感というか、そういうものがあるのがいいかなと思っています」「・・・演奏している際も、時間というものは動いています。たぶんCDだと、その感覚が少し違うと思うんです。オーディオで聴く場合と会場で聴く場合の違いというか、空気感とか、その時の温度、湿度、様々なものを感じながらライブ感を味わっていただければ・・・」

筆者の後ろの座席で聴いていらしたご夫婦が、まさに、『CDもいいけどライブはまた全然違うね。本当にライブだね。来てよかったね』と話されていたことを伝えると、ぱっと、うれしそうな笑顔。

＜演奏会概要＞
◆プログラム
＜ツアー・プログラムⅠ　＞
スクリャービン：幻想曲 Op.28
ドビュッシー：喜びの島
ドビュッシー：ベルガマスク組曲 第3曲「月の光」
シューマン：ウィーンの謝肉祭の道化 Op.26
ショパン：4つのマズルカ Op.17
ショパン：12の練習曲 Op.10
◆アンコール
リスト：「水の上を歩くパオラの聖フランチェスコ」
シューマン/リスト：「献呈」

ピアノに打ち込んだきっかけは11歳のときの指揮体験。オーケストラを振る機会を得、非常に感動を覚えたそうだ。「指揮者になりたい」と先生に伝えたら、「まずは楽器を弾けること。ピアノをちゃんとやりなさい」とアドバイスをいただいたことが今につながっている。

「・・・そういうこともあって、今、ピアノコンチェルトを書き始めています。『指揮者になりたい』と思いながらピアノを弾いている人達を想定した、ピアニストのための『弾き振り（ピアノを弾きながら指揮も振る）』のコンチェルトです。・・・意外に思われるかもしれませんが、自分の作風は古典派です（笑）」

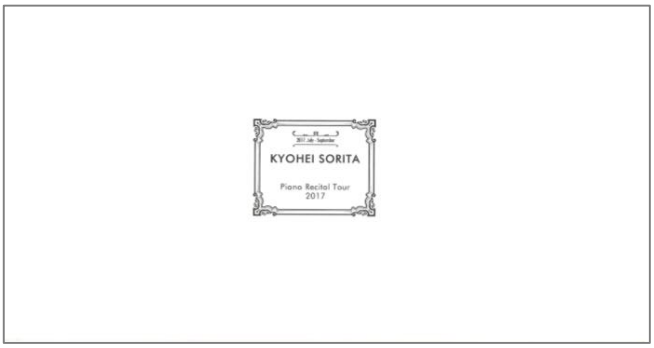
２年先、２年半先・・・、と予定が詰まる反田さん。これだけ多忙でも、どんどんアイデアが生まれ、またそれを実行に移すべく、どんどん挑んでいるようだ。少し前には、同年代の音楽家仲間との新しいユニット（“MLMダブル・カルテット”）の立ち上げが発表された。「・・・ありがたいことに今、いろいろな機会をいただいています。そうした機会で得た経験を活かし、仲間との活動も始めます。小さな子供達や同年代のみんなに“音楽を愛する”という事を共感していただけたらいいなと思っています」・・・次々と楽しそうに語ってくれた。

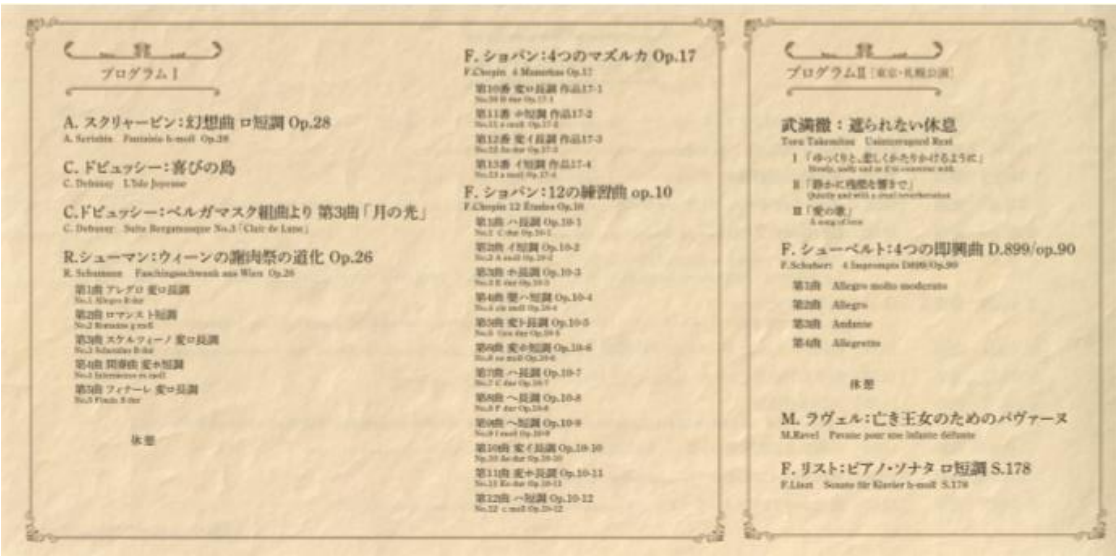
もともと、いろんなジャンルの音楽が好きという反田さん。クラシックという枠にこだわっていないというか、そもそもくくっていないというか・・・。その演奏や話からも印象強い、のびのびとした自由でナチュラルな感性で、どんどん駆け抜けていくのであろう。

ツアーもまだまだ続く。暑い夏場、体調維持にも気を遣うことだろう。
反田さん、ラストまで素敵な演奏を！

本人写真は終演後のサイン会時
上はツアー共通の特製プログラム

【コンサート・プログラム】





プログラムⅠ

A. スクリャービン：幻想曲 ロ短調 Op.28
A. Scriabin　Fantaisie h-moll　Op.28

C. ドビュッシー：喜びの島
C. Debussy　L'Isle Joyeuse

C.ドビュッシー：ベルガマスク組曲より 第3曲「月の光」
C. Debussy　Suite Bergamasque No.3「Clair de Lune」

R.シューマン：ウィーンの謝肉祭の道化 Op.26
R. Schumann　Faschingsschwank aus Wien　Op.26

第1曲 アレグロ 変ロ長調
No.1 Allegro B-dur
第2曲 ロマンス ト短調
No.2 Romanze g-moll
第3曲 スケルツィーノ 変ロ長調
No.3 Scherzino B-dur
第4曲 間奏曲 変ホ短調
No.4 Intermezzo es-moll
第5曲 フィナーレ 変ロ長調
No.5 Finale B-dur

休憩

F. ショパン：4つのマズルカ Op.17
F.Chopin　4 Mazurkas Op.17

第10番 変ロ長調 作品17-1
No.10 B-dur Op.17-1
第11番 ホ短調 作品17-2
No.11 e-moll Op.17-2
第12番 変イ長調 作品17-3
No.12 As-dur Op.17-3
第13番 イ短調 作品17-4
No.13 a-moll Op.17-4

F. ショパン：12の練習曲 op.10
F.Chopin 12 Etudes Op.10

第1曲 ハ長調 Op.10-1
No.1　C-dur Op.10-1
第2曲 イ短調 Op.10-2
No.2 A-moll Op.10-2
第3曲 ホ長調 Op.10-3
No.3 E-dur Op.10-3
第4曲 嬰ハ短調 Op.10-4
No.4 cis-moll Op.10-4
第5曲 変ト長調 Op.10-5
No.5　Ges-dur Op.10-5
第6曲 変ホ短調 Op.10-6
No.6 es-moll Op.10-6
第7曲 ハ長調 Op.10-7
No.7 C-dur Op.10-7
第8曲 ヘ長調 Op.10-8
No.8 F-dur Op.10-8
第9曲 ヘ短調 Op.10-9
No.9 f-moll Op.10-9
第10曲 変イ長調 Op.10-10
No.10 As-dur Op.10-10
第11曲 変ホ長調 Op.10-11
No.11 Es-dur Op.10-11
第12曲 ハ短調 Op.10-12
No.12　c-moll Op.10-12

プログラムⅡ［東京・札幌公演］

武満徹：遮られない休息
Toru Takemitsu　Uninterrupted Rest

Ⅰ「ゆっくりと、愛しくかたりかけるように」
Slowly, softly and as if in a caressing way.
Ⅱ「静かに残響を響かせて」
Quietly and with a small reverberation
Ⅲ「愛の歌」
A song of love

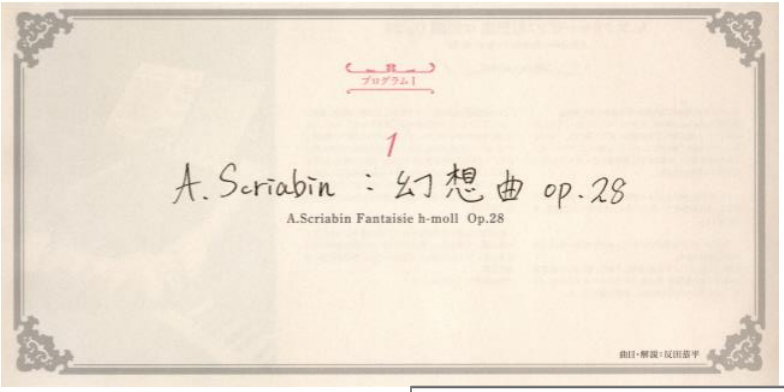
F. シューベルト：4つの即興曲 D.899/op.90
F.Schubert　4 Impromptu D899/Op.90

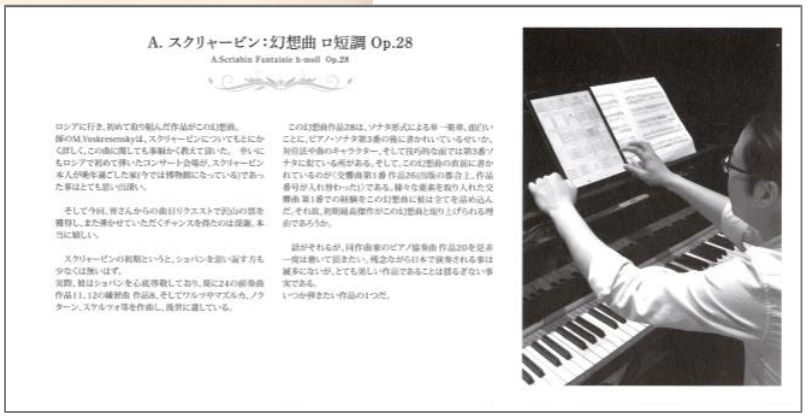
第1曲　Allegro molto moderato
第2曲　Allegro
第3曲　Andante
第4曲　Allegretto

休憩

M. ラヴェル：亡き王女のためのパヴァーヌ
M.Ravel　Pavane pour une Infante défunte

F. リスト：ピアノ・ソナタ ロ短調 S.178
F.Liszt　Sonate für Klavier h-moll　S.178





A. スクリャービン：幻想曲 ロ短調 Op.28

A.Scriabin Fantaisie h-moll Op.28

ロシアに行き、初めて取り組んだ作品がこの幻想曲。
師のM.Yeskresenskyは、スクリャービンについてもとにかく詳しく、この曲に関しても事細かく教えて頂いた。 中いにもロシアで初めて弾いたコンサート会場が、スクリャービンを人が晩年過ごした家(今では博物館になっている)であった事はとても思い出深い。

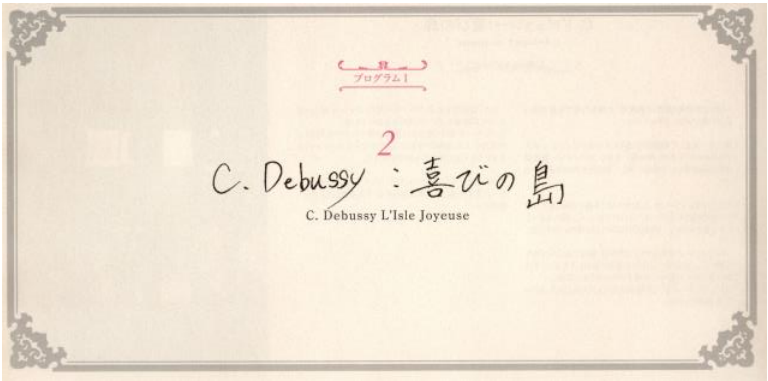
そして今回、皆さんからの曲目リクエストで沿山の票を獲得し、また演かせていただくチャンスを得たのは深謝、本当に嬉しい。

スクリャービンの初期というと、ショパンを思い返す方も少なくは無いはず。
実際、彼はショパンを心底尊敬しており、現に24の前奏曲作品11、12の練習曲 作品8、そしてワルツやマズルカ、ノクターン、スケルツォ等を作曲し、後世に遺している。

この幻想曲作品28は、ソナタ形式による単一楽章、由引いことに、ピアノ・ソナタ第3番の後に書かれいているせいか、対位法や曲のキャラクター、そして技巧的な面では第3番ソナタに似ている所がある。そして、この幻想曲の表面に書かれているものが(交響曲第1番作品26(当時の番号)と、作品番号が入れ替わった)である。様々な要素を取り入れた交響曲 第1番での経験をこの幻想曲に彼は全てを詰め込んだ、それ故、初期最高傑作がこの幻想曲と取り上げられる理由であろうか。

話がそれるが、同作曲家のピアノ協奏曲 作品20を是非一度は聴いて頂きたい。残念ながら日本で演奏される事は滅多にないが、とても美しい作品であることは語るまでもない事実である。
いつか弾きたい作品の1つだ。

【コンサート・プログラム】



C. ドビュッシー：喜びの島

C. Debussy L'Isle joyeuse

一括りに印象派（印象主義音楽）と言を代表する作曲家とは言い難いのが、ドビュッシー。

新たな一歩として印象派を開拓したのはドビュッシー本人とも言われているが、興味深いことに、ドビュッシー自身は印象主義音楽という用語に対して否定的な見解を示したという。

そんなドビュッシーは、上記から伺える様に神経質で気難しい性格の持ち主だったと言われており、人と関わるよりもシャム猫を好み、いつも気付けば部屋には猫がいたそうだ。

ドビュッシーで有名なのは女性の話。幾度となく駆け落ちを繰り返し、最終的には今妻の母親と結婚してしまい、その駆け落ち旅行の最中に作曲されたのが「喜びの島」。
彼にしては珍しい性的約密表を取り入れた作品となっており、色彩豊かである。

また、諸説はあるが、ゲントーの作品「シテール島への巡礼」からの影響を受けているとも言われている。
このシテール島は、神話では愛の女神ヴィーナスの島とされており、この複数の事柄から、内気なドビュッシーではあったがとても幸せであった事が伺える。

民族的なリズム、華やかな和声、そして休符の意味―ロシア音楽に通じる所が幾度見える、そんな作品を、楽しく弾きたい。

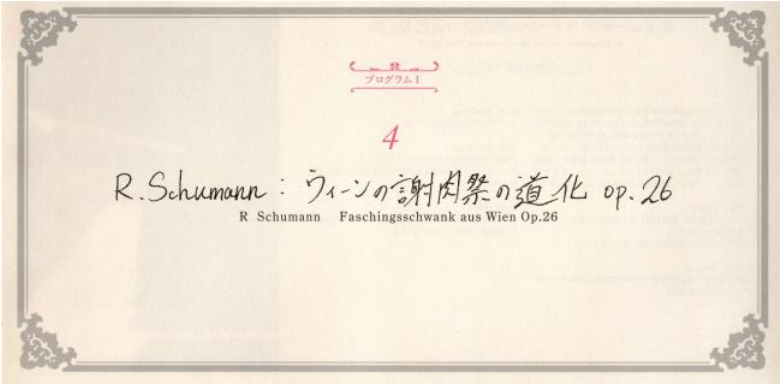
C.ドビュッシー：ベルガマスク組曲より 第3曲「月の光」

C. Debussy Suite Bergamasque No.3 「Clair de Lune」

詩人、P. ヴェルレーヌの作品を元にして作曲されたベルガマスク組曲。

『月の光』という題名は、クラシックに馴染みのない人でもきっと聞いたことがあるはず。
シンプルな音列で、目つ動がない作品である故、響きや音景を表現するのはとても難しい

【コンサート・プログラム】



R.シューマン：ウィーンの謝肉祭の道化 Op.26

R. Schumann Faschingsschwank aus Wien Op.26

シューマンが1838年の秋から半年間滞在していたウィーンで丁度、謝肉祭が行われており、その謝肉祭からのインスピレーションを十二分に発揮し書いた作品。盛り上がった興奮、賑やかな祭騒みや人々を見事に描写している。計5曲のうち4曲はウィーン滞在中に書かれ、最後の一曲は帰郷し書かれた。このスピードから、シューマンにとっていかにウィーン滞在が良き経験、思い出となったかが伺える。

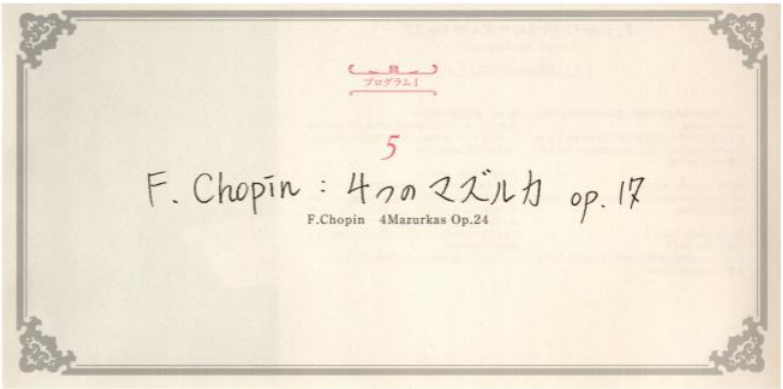
第1曲 Allegro
パレードが始まり、民衆が楽しげに踊を踏み、明い歌っている姿が浮かび上がる。
曲中にはフランス国歌の一部が挿入されている。

第2曲 Romanze
25小節という短い曲だが、その中で歌われる悲しみのメロディーが印象深く残る。

第3曲 Scherzino
ユーモラスで色彩に富んだ一曲

第4曲 Intermezzo
日本語では間奏曲にあたる インテルメッツォ。
野太く深いメロディの裏には繊細な一面があり、無言歌の様に美しい。

第5曲 Finale
ソナタ形式によるフィナーレは、興奮覚めやらぬ雰囲気が続かれ、最終曲に相応しい迫力さがある。



F. ショパン：4つのマズルカ Op.17

F.Chopin 4Mazurkas Op.17

パリから別を惜しでから最初に書かれた作品で計4曲からなるマズルカ集。
作品17までのマズルカは民族音楽っぽさを全面に出し、曲全体の色合いを出していたが、パリ移住後からは内容がより洗練されることになる。

第10番 変ロ長調 作品17-1
ポロネーズに通じる異国さがあり、dolceと書かれた中間部には愛らしさがある。

第11番 ホ短調 作品17-2
短調 のクヤーヴィヤク
面白いことに中間部の底音が14小節にわたり継続している。
憂鬱の中からの逃げなのか…

第12番 変イ長調 作品17-3
勝利音とシンコペーションを多用した作品。手慣していそうでしていない、ユーモア溢れる作品。中間部では上行していく右手が非常にお洒落である。

第13番 イ短調 作品17-4
左手の絶特な和声進行、どこか別りの場地に行ってしまった右手の旋律。非常に良整感うや一曲。遠くから誘が出て、惑みそうで掴めない感する物がそこにはあって… そういった情景を思い浮かばす様に書かれた和声。
しかし主音のa音が常に変とわかつ入っているため、辻褄が合い、聴きやすくなっている。
これぞショパンの魔幽味でもあるのではないだろうか?

【コンサート・プログラム】

F. ショパン：12の練習曲 Op.10

F.Chopin 12 Études Op.10

1.

練習曲と名がついた作品は世の中には数えきれない程あるが、ショパンの練習曲は異例の作品集である。練習曲はそもそも、基本的な技術や演奏能力を向上させるために書かれた楽曲の事を指すため、どうしても"お稽のおけいこ"という印象を与えがちだが、ショパンの練習曲集は、より音楽的な思考、工夫を独自で考えなければ手の内に入れられない。

ショパンはバッハに対してのオマージュとして練習曲を作曲したお訳だが、12という数は我々にとっても重要視しなければならない数字だ。身近で目にするものの例えといえば…

"12時間"、12ヶ月"、"12星座"、"方位"等があり、そして我々に欠かせないのが12平均律(十二平均律)で音楽は基本的に12成り立っており、全部で24の調性。

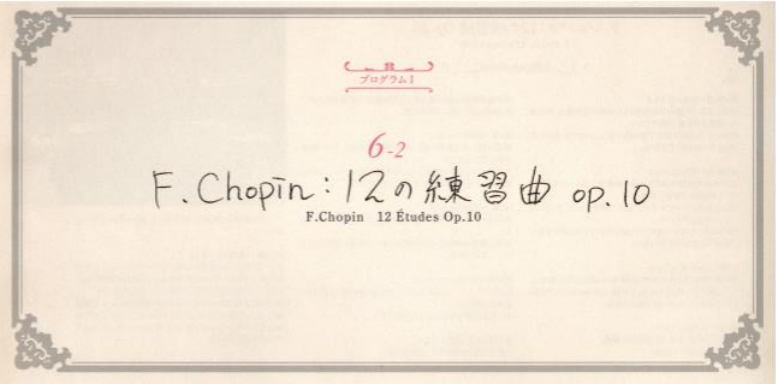
今回第6作品10の練習曲では平行調例、ハ長調→イ短調や、下属調(ハ長調→ヘ長調)への移調で最後まで成り立っており、なにより作品ひとつひとつの性格が際立ち、華やかさもある故、今日では学習者の金字塔となっている訳である。

第1番 ハ長調 Op.10-1
登りとした左手の音階の上に、4オクターブに及ぶ音域の交差を繰り返し演奏していく様は、まるで木々が風と対話をしている様にも見えてくる。
ちなみに名ピアニスト、アルフレッド・コルトーは自身の指に記載した到達目標に"威風と雅気"と残している。

第2番 イ短調 Op.10-2
半音階を優雅に駆け巡り、且つ和声の発音をしっかりと出さなければならない右手に、多くのピアニストたちが頭を悩えるほどの難曲。これぞ練習曲の醍醐味、といった作品。

第3番 ホ長調 Op.10-3
『別れの曲』としても有名な作品。着目すべき所は、メロディ以外の声部であろう。
内声から出てくる表現の密度、指の置き代えによる音の連結、音色の変遷が課題の作品。

(2 に続く)



F. ショパン：12の練習曲 Op.10

F.Chopin 12 Études Op.10

2.

第4番 嬰ハ短調 Op.10-4
全曲とは打って変わり急速な16分音符から始まり、休む事なく最後まで全霊が捧げていく。
意外にも本公演で初めて弾く曲であり、自身が正面から取り組んだのも初めてである。

第5番 変ト長調 Op.10-5
右手が終始黒鍵を弾くことから「黒鍵のエチュード」と言われ、とても明るく軽快な作品。
最後にはオクターブで下方へ進行で降りていき、次の作品へと手くつなげている。
実は曲中に右手では自だけ白鍵を弾いている箇所があるのは意外にも知られていない。

第6番 変ホ短調Op.10-6
第5番の最終音と対に音から始まるこの曲はとても薄暗く、どこか掴めない作風である。その鍵、となるのが、左手の絶妙な語らぎ、左手あっての作品である。

第7番 ハ長調Op.10-7
第2部を意識してか、第1番と対に調性。
和の雰囲気漂すハ長調。

手の働きを最小限に減らすことで強靭な力を出せることができ、流動性が一貫して保たれる。

第8番 ヘ長調 Op.10-8
第4番同様16分音符が絶えず、小動物が疾走していく映像が頭に浮かぶ作品。
左手のメロディがまた美しい、和声進行用にはシンプルに構成されており、動物の様な躍動となっている。

第9番 ヘ短調 Op.10-9
同主調であるヘ長調からのヘ短調は冠多な移り変わりである。
音楽の品性を深めるための作品。曲中で唱さとも思われるフレーズが現れる。

第10番 変イ長調Op.10-10
6度をテーマにした練習曲だが、繋の和調の表ちが語ってくる楽曲な作品だ。
変ヰ転調を幾り返し続くものを魅了する。

第11番 変ホ長調Op.10-11
アルペジオ、協奏音のための練習曲。

ハープを連想させる表法で作曲されており複雑な空間へと誘う。

第12番 ハ短調 Op.10-12
ロシア帝国からの独立を目指したポーランド、しかし革命が失敗し、故郷ワルシャワが陥落したとの報を受けたのは、ショパンが演奏旅行で南ドイツを進んでいた最中だった。
戦神的にも作曲ではなかったこの時の曲が書いたこの練習曲は、他の作品よりも近に反逆の生命力や、内に込めた戦神性を持っている作品となった。「革命のエチュード」と今日では呼ばれている。